

知床、世界遺産候補の課題と取り組み



私たちの活動している知床は、今年1月、環境省などにより正式に世界遺産推薦地としてユネスコ世界遺産委員会に推薦書が提出された。早ければ来年6月にも正式登録の見込みだが、登録に向け地元ではさまざまな動きが活発になってきている。もっとも、活発なのは行政機関やさまざまな業界団体などに限られているといってもよいかもしれない。一般の住民にとっては期待と不安が入り混じった複雑な心境なのだ。登録されれば、屋久島、白神山地に続き国内三番目の自然遺産登録となるが、先例の二ヶ所でのさまざまな問題や課題を伝え聞くにつれ、世界遺産登録は地元にとって必ずしもうれしいことばかりではないことを感じている。

これは、世界遺産登録如何に関わらず、自然の資源とその自然に根ざした地域文化との持続可能な観光振興を図る「エコツーリズム」の意味ある実践、そして屋久島・白神山地との大きな違い。良くも悪くも完成された大型観光地から、エコツーリズムディスプレイーション（目的地）への脱皮という壮大な取り組みであることの重みが、シワジワと実感として地元にはしかかってくるのだ。

私は自然体験型ツアー業者として、地域NPOとして、さまざまな公職委員として、そして一住民としてこの課題に正面から取り組んでいるつもりだ。これらは知床にとって避けては通れない道であり、逆に丁寧な課題をクリアできれば、日本でも類を見ないパワーエコツーリズムディスプレイーションへと変身する絶好のチャンスだからだ。

マストツーリズムのエコ化

環境省は世界遺産推薦と同時に、知床をエコツーリズム推進モデル地区とすることを表明している。このモデル事業はエコツーリズムを

豊かな自然の中での取り組み

多くの来訪者が訪れる観光地での取り組み

里地の身近な自然、地域の産業や生活文化を活用した取り組み

ととらえ、エコツアーをさらに活発化させ、地域経済の発展と自然環境への理解を深めることを目指すものとしている。この中で知床にとっての最も大きな課題は、マストツーリズムに根ざした観光システムをいかに知床の自然にマッチしたものとへ移行させていくかということだ。

知床は女満別空港などからのアクセスの良さも手伝って、年間200万人にも及ぶ観光客が訪れ、大型観光ホテルがひしめくウトロ地区の年間60万泊という数字が、地域の観光産業を支えている。一方で、知床国立公園での利用地区は知床五湖や羅臼岳の登山道といったごく一部に限られ、観光客の集中とヒゲマとのあつれきが問題となっている。

知床のような一級の原生的な自然を楽しむには、例えば「ノーゼーランドのミルフォードトラック」のように、厳しい総量制限とネイチャーガイドによる管理下でのレクリエーションが理想的だが、多くの入れ込みで成り立っている知床にそういった仕組みを当てはめるのは現実的ではない。それは知床の最大の悩みと云うのである。

ちなみにNPO SHINRA(知床ナチュロリスト協会)は、60万泊の全てを2泊にして、入れ込みの半減と経済規模確保の両立という青臭いミッションを掲げている。もちろん、それも一朝一夕に達成できるわけではない。しかしながら、「滞在化」という古くて新しい課題は、いわば王道の手法としてウトロが取り組まなければならないテーマの一つである。

エコツアー・滞在化促進という視点とインタープリテーションという視点

滞在化という視点でのアウトドア観光をさらに活性化しようという動きが盛んだ。例えばSHINRAで始めた「流水ウォーク」も、冬に漁の



ヒグマに不用意に近づく観光客



五湖の混雑



知床五湖。朝や夕方には観光バスが集中する

ない漁業関係者やその他の事業者の間でも盛んになり、今や冬の流水観光の大きな目玉の一つにまで成長した。地元の観光協会でも、アウトドア観光のプロモーションに向け予約受け付け体制の強化などをつたっており、また、自然体験に限らず、農業体験や漁業体験などを研究する人も増えてきている。

しかしながら、現地での滞在メニューという市場で、体験業者やお客さんにとって直接的なメリットを生み出すこうした取り組みも、自然を大切にしながら経済発展をしようとするというサステイナブル(持続可能)な考え方には必ずしも至っていないと言わざるを得ない。

そういった点では、知床のような地域には自然のメカニズムや楽しさをお客さんに提供し、実体験から自然環境保全への関心を引き出すインタープリテーション(自然解説)手法による体験メニューの充実が求められている。

知床では知床財団という半官半民の組織でのインタープリテーションプログラムの取り組みが古くからされており、一種の「知床スタンダード」を作り上げてきたといっても過言ではない。さらに今では多くのガイド事業者がそれぞれの個性を活かしたインタープリテーションプログラムを展開しており、お客さまは好みに応じて事業者を選別するという流れができてつつある。例えばSHINRAでは、ホテルのバトラーサービス(客の一人一人に合わせたきめ細かなサービス)のようなフルホスピタリティを追求している。もっと植物の生態を勉強したいというお客さんは私たちを選び、他の業者を選ぶ。同じ場所に行っても、選ぶガイド業者によって全く印象が違うというのは、限られた利用地域で最大限の効果を発揮するには有効なシステムだ。サステイナブルな観光振興には個性的なアウトドア業者を育てる必要があるのだ。

エコツーリズムのガイドラインづくり

そういったことから、知床地域のネイチャーガイド業者によるガイドラインづくりが進みつつある。本年4月にはネイチャーガイドの連携組織である知床ガイド協議会が発足した。そこではガイドの質とステイタスの向上を目指し、民間ガイドが中心となっており一定のまとまりを作ることを目指している。その際、環境省が新たに導入する国立公園の利用調整地区制度、すなわち総量規制と魅力的なバックカントリー(自然のままのフィールドや裏山)利用を両立させる取り組みの調整役として、自治体や知床財団のような半官半民の組織へ期待が寄せられている。

SHINRAでも今年、経団連自然保護基金の補助を受けて、世界遺産の審査機関でもあるIUCN(国際自然保護連合)のガイドライン研究と出版さらには新しいプロモーションの模索の一環としてインターネット放送局を設立し、従来とは違った視点での情報発信を始めている。

いわばこのようなグローバルスタンダードと知床の自然にフィットしたローカルスタンダードの二本柱がそろって、はじめて世界遺産の名に恥じない、しっかりとした地域ホスピタリティが生まれるものと信じている。

有機的に連携した主体的なまちづくりを

知床ではこういった世界遺産登録に向けての取り組みと同時に、再開発に伴う国道のグレードアップ、住民参加に向けてのさまざまな活動も活発になってきている。また、知床の世界遺産の集客分散と滞在化、体験観光化の流れから、広域連携に向けての取り組みも始まっている。

こういったいろいろな動きをハバハラではなく有機的に連携させ、トータルな意味で地域が主体的に取り組んでいけるまちづくりの推進が必要だ。私も事務局を務めているいくつかのまちづくりグループには、官民あるいは役職の壁を乗り越

越える熱心な人が参加し、お互い本音で語りあっている。そういった場をこれからも大切にしながら、縦割りの行政に少しでも横のつながりをつくれるよう、コーディネートするお手伝いを続けていきたい。

NPO SHINRA(知床ナチュラルリスト協会)

代表理事 藤崎 達也



ドライスーツでプカプカと流水風呂



最近人気の流水ウォーク